

## Ⅱ 都市の社交空間：ホテル、倶楽部、バー

大阪は民都と言われる。近世、江戸は武士と政治の街に対して、大坂は町人と商いの街であり、近代以降も商工業分野では主に民中心の経済活動が都市大阪の基盤となった。五代友厚ら在野の経済人によって、都市大阪は発展を遂げた。

21 世紀に入ったいま、都市のあり方を巡って、その創造性をいかに高めるかが都市の存亡を左右するといわれる。創造都市論がその代表例といえるだろう。

創造力ある都市には、価値ある人と情報の交流や知的好奇心によって、新たな文化が創造され、発信されていく力を有する。知的価値を支える都市の文化的基盤が都市の社交空間であろう。グランフロント大阪のナレッジキャピタルや六本木ヒルズのアカデミーヒルズなど、新たな都市づくりにおいて、現代的都市社交空間を模索する動きは盛んである。

こうした、人と人との知的交流を支える社交空間は、かつてから存在していた。パリのベル・エポックの象徴ともいえるカフェがピカソ、サルトルのような芸術家や哲学者のたまり場となっていたのは有名な話だ。大阪にもそんな物語が語られる場所がいまも生きている。

業界経済人、財界人が集まる社交倶楽部や業界サロンとしての会館建築が多いのは大阪の特徴だ。[大阪倶楽部](#)（1924 年：安井武雄）、綿業会館（1931 年：渡辺節）、[中央電気倶楽部](#)（1930 年：葛野壮一郎）などが大阪の都心には数多く残る。

戦前期、大阪の迎賓館としての国際的近代ホテルである新大阪ホテルを設立したリーガロイヤルホテルは、中之島にある大阪を代表するホテルだ。その一角に[リーチバー](#)はある。英国の陶芸家バーナード・リーチのアイデアを再現したとされるホテルのメインバーは 1965 年にオープンしている。そのコンセプトは民藝運動の中心人物、柳宗悦により練られたものという。民藝作品に囲まれた英国バーはいまも昔も大人の社交空間として愛されている。

こうした風格ある社交空間は、街角にもある。その代表格がバーだ。神戸のミルクホールを源流にもつ[堂島サンボア バー](#)（1955 年：設計者不詳）は戦前から営業するスタンディングバーで、今宵も大人の社交場としてにぎわっているはずである。

サードプレイスとしてのカフェの重要性が認識されるようになった現代においても、大阪という都市の創造性の源泉となる社交空間は時代を超えて健在だ。そのバリエーションが民都大阪を特徴づけている。（[嘉名光市](#)）



写真上 昭和10年（1935）新大阪ホテル開業披露宴

写真下（左）大阪ロイヤルホテル（昭和40年/1965開業）のロゴマーク

写真下（右）開業当初のリーチバー

（出所 リーガロイヤルホテル 70年の歩み）